

「楽譜を読むこと」を大切にした歌唱アンサンブル

－ 感受性を育み、学びのもののさしを活かした音楽表現の追求 －

2021年度は『音楽のおくりもの5』に掲載されている歌唱教材《ハロー・シャイニングブルー》を扱った。前半は斉唱、後半から2部合唱に切り変わる作品である。楽譜上に強弱記号が記されていない点に着目し、テーマは「強弱をつくりあげて歌おう」と設定された。授業では後半部分を中心に、「強弱」に焦点をあて、児童が表現を思考する活動が展開された。今回は『音楽のおくりもの6』から歌唱教材《ぼくらの日々》が取り上げられた。昨年度に続く活動形態は共通して2部合唱を伴う歌唱アンサンブルであるが、楽譜を深く読むことに重点においた実践では、より多くの学びの広がりを見せている。

共に学び、クラスの歌声を作り上げていくための下地作りを実践

歌には歌詞が伴う。歌詞を声に出して読み、歌詞の中の抑揚や区切り方を確認すること、また児童ひとりひとりが歌詞の世界が描くイメージをもち、互いのイメージを共有し合うことは「楽譜を読む」という学習活動の一部を成す。さらに作品に対するよりより表現解釈へと繋がっていくように指導者が活用したのは、教科書会社によるデジタル補助教材「まなびリンク」である。教科書に掲載されている「まなびリンク」のQRコードやURLにアクセスしていくと、「作者からみなさんへ」と題して《ぼくらの日々》を作者・作曲した池田綾子さんによる曲への思いをこめたメッセージと自身による歌声が視聴できる。演奏形態は、ピアノ伴奏付き独唱（ソロ）。児童が歌の曲想をつかみ、主旋律を覚えられる点に、この教材のメリットがある。特に主旋律の知覚は、異なるパート練習とパートを合わせた際に、各パートの役割を認識させ、表現の工夫を促す鍵となる。クラスの歌声を作り上げていくための「下地作り」が、周到に準備されていた。

歌唱ジャンルがもたらす学び～「サビ」をめぐって

古くから親しまれ歌い継がれてきた「共通歌唱教材」の歌詞が描く世界観と曲想を異にする「ポピュラー音楽」の作品を、現代の子供たちは違和感なく受け入れている。教科書には「サビ」という記述は見当たらないが、発言や他者との対話の中で、児童が「サビ」という言葉を無意識的に用いている実態に発見があった。「サビ」という言葉の意味は時代と共に変わりつつあり、専門的な知識に基づいて使用されていなくとも、聴き手からすれば「サビ」とは作品の一番の聞かせどころであること、歌い手側からすれば盛り上がりを感じて歌う箇所が「サビ」であることを、児童は感覚的に分かっていた。歌唱実践では「サビ」に向かう強弱変化（クレッシェンド）と「サビ」の箇所に入る表現（フォルテ）の工夫について、試行錯誤している児童の姿があった。その姿は、自分たちの目指したい歌唱表現作りに、音楽科の「学びのもののさし」が機能していた瞬間である。楽曲の終盤にも、反復による「サビ」の箇所がある。指導者は、児童にピアノ伴奏の変化に着目させた。伴奏に耳を傾けること、声とは違う楽器音を知覚し、歌声のない音楽にも「学びのもののさし」を感受させる働きかけをしていた。

楽譜を読む活動の大切さ

マスク着用による歌唱実践では声の響きが抑えられるため、聴き手にとって表現上のニュアンスは判断しづらいが、児童ひとりひとりのエネルギーが力強い歌声となって音楽室に響いていた。指導者が、歌唱実践よりも「楽譜を読むこと」に学習時間を割く発想の転換は、コロナ禍がもたらしたものである。おかげで、教科独自の見方・考え方を働かせる上で必要な「学びのもののさし」が着々と身につけている。小学校高学年から中学校への円滑な接続性に向けて、楽譜を読む姿勢を保ち、実践を伴いながら知覚と感受が育まれていくような授業の展開を今後も期待したい。